女客

泉鏡花

一

「謹さん、お手紙、」

と階子段（はしごだん）から声を掛けて、二階の六畳へ上（あが）り切らず、欄干（てすり）に白やかな手をかけて、顔を斜（ななめ）に覗（のぞ）きながら、背後（うしろ）向（む）きに机に寄った当家の主人（あるじ）に、一枚を齎（もた）らした。

「憚（はばか）り、」

と身を横に、蔽（おお）うた燈（ともしび）を離れたので、玉（ぎょく）ぼやを透かした薄あかりに、くっきり描き出（いだ）された、上り口の半身は、雲の絶間の青柳（あおやぎ）見るよう、髪も容（かたち）もすっきりした中年増（ちゅうどしま）。

これはあるじの国許（くにもと）から、五ツになる男の児（こ）を伴うて、この度上京、しばらくここに逗留（とうりゅう）している、お民といって縁続き、一蒔絵師（あるまきえし）の女房である。

階下（した）で添乳（そえぢ）をしていたらしい、色はくすんだが艶（つや）のある、藍（あい）と紺、縦縞（たてじま）の南部の袷（あわせ）、黒繻子（くろじゅす）の襟のなり、ふっくりとした乳房の線、幅細く寛（くつろ）いで、昼夜帯の暗いのに、緩く纏（まと）うた、縮緬（ちりめん）の扱帯（しごき）に蒼味（あおみ）のかかったは、月の影のさしたよう。

燈火（ともしび）に対して、瞳清（すず）しゅう、鼻筋がすっと通り、口許（くちもと）の緊（しま）った、痩（や）せぎすな、眉のきりりとした風采（とりなり）に、しどけない態度（なり）も目に立たず、繕わぬのが美しい。

「これは憚り、お使い柄恐入（おそれい）ります。」
と主人は此方（こなた）に手を伸ばすと、見得もなく、婦人（おんな）は胸を、はらんばいになるまでに、ずッと出して差置くのを、畳をずらして受取って、火鉢の上でちょっと見たが、端書（はがき）の用は直ぐに済んだ。

机の上に差置いて、

「ほんとに御苦労様でした。」

「はいはい、これはまあ、御丁寧な、御挨拶（ごあいさつ）痛み入りますこと。お勝手からこちらまで、随分遠方でござんすからねえ。」

「憚り様ね。」

「ちっとも憚り様なことはありやしません。謹さん、」

「何ね、」

「貴下（あなた）、その（憚り様ね）を、端書を読む、つなぎに言ってるのね。ほほほほ。」

謹さんも莞爾（にっこり）して、

「お話しなさい。」

「難有う（ありがと）、」

「さあ、こちらへ。」

「はい、誠にどうも難有う存じます、いいえ、どうぞもう、どうぞ、もう。」

「早速だ、おやおや。」

「大分丁寧でございましょう。」

「そんな皮肉を言わないで、坊やは？」

「寝ました。」

「母は？」

「行火（あんか）で、」と云って、肱（ひじ）を曲げた、雪なす二の腕、担いだように寝て見せる。

「貴女（あなた）にあまえているんでしょう。どうして、元気な人ですからね、今時行火をしたり、宵の内から転寝（うたたね）をするような人じゃないの。鉄は居ませんか。」

「女中さんは買物に、お汁（みおつけ）の実を仕入れるのですって。それから私がお道楽、翌日（あした）は田舎料理を達引（たてひ）こう

と思って、ついでにその分も。」

「じゃ階下は寂しいや、お話しなさい。」

お民はそのまま、すらりと敷居へ、後手を弱腰に、引っかけの端をぎゅうと撫で、軽く衣紋を合わせながら、後姿の襟清く、振返って入ったあと、欄干の前なる障子を閉めた。

「ここが開いていちゃ寒いでしょう。」

「何だかぞくぞくするようね、悪い陽気だ。」

と火鉢を前へ。

「開ッ放しておくからさ。」

「でもお民さん、貴女が居るのに、そこを閉めておく

のは気になります。」

時に燈に近う来た。瞼（まぶた）に颯（さっ）と薄紅（うすくれない）。

二

坐（すわ）ると炭取を引寄せて、火箸（ひばし）を取って俯向（うつむ）いたが、

「お礼に継いで上げましょうね。」

「どうぞ、願います。」

「まあ、人様のもので、義理をするんだよ、こんな呑気（のんき）ッちゃありゃしない。串戯（じょうだん）はよして、謹さん、東京（こっち）は炭が高いんですってね。」

主人（あるじ）は大胡座（おおあぐら）で、落着澄まし、

「吝（けち）なことをお言いなさんな、お民さん、阿母（おふくろ）は行火（あんか）だというのに、押入には葛籠（つづら）へ入って、まだ蚊帳（かや）があるという騒ぎだ。」

「何のそれが騒ぎなことがあるもんですか。またいつかのように、夏中蚊帳が無くっては、それこそお家は騒動ですよ。」

「騒動どころか没落だ。いや、弱りましたぜ、一夏は。

何しろ、家の焼けた年でしょう。あの焼あとというものは、どういうわけだか、恐しく蚊が酷（ひど）い。まだその騒ぎの無い内、当地（こちら）で、本郷のね、春木町の裏長屋

を借りて、夥間(なかま)と自炊をしたことがありましたっけが、その時も前の年火事があったといって、何年にもない、大変な蚊でしたよ。けれども、それは何、少い(わか)もの同志だから、萌黄縅(もえぎおどし)の鎧(よろい)はなくても、夜一夜(よっぴて)、戸外(おもて)を歩行(ある)いていたって、それで事は済みました。

内じゃ、年よりを抱えていましょう。夜が明けても、的(あて)はないのに、夜中一時二時までも、友達の許(とこ)へ、苦(くる)しい時の相談の手紙なんか書きながら、わきで寝返りなさるから、阿母(おっか)さん、蚊が居ますかって聞くんです。

自分の手にゃ五ツ六ツたかっているのに。」

主人(あるじ)は火鉢にかざしながら、

「居ますかもないもんだ。

ああ、ちっと居るようだの、と何でもないように、言われるんだけれども、なぜ阿母(おふくろ)には居るだろうと、口惜(くやし)いくらいでね。今に工面してやるから可(い)い、蚊の畜生覚えていろと、無念骨髄(むねんこつずい)でしたよ。まだそれよりか、毒虫のぶんぶん矢を射るような烈(はげし)い中に、疲れて、すやすや、……傍(わき)に私の居るのを嬉しそうに、快よさそうに眠られる時は、なお堪(たま)らなくって泣きました。」

聞く方が歎息して、

「だってねえ、よくそれで無事でしたね。」

顔見られたのが不思議なほどの、懐かしそうな言(ことば)

であった。

「まさか、蚊に喰殺されたという話もない。そんな事より、恐るべきは兵糧（ひょうろう）でしたな。」

「そうだってねえ。今じゃ笑いばなしになったけれど。」

「余りそうでもありません。しかしまあ、お庇様（かげさま）、どうにか蚊帳もありますから。」

「ほんとに、どんなに辛かったろう、謹さん、貴下（あなた）。」

と優しい顔。

「何、私より阿母ですよ。」

「伯母さんにも聞きました。伯母さんはまた自分の身

がかせになって、貴下が肩が抜けないし、そうかといって、修行中で、どう工面の成ろうわけはないのに、一ツ売り二つ売り、一日だてに、段々煙は細くなるし、もう二人が消えるばかりだから、世間体さえ構わないなら、身体（からだ）一ツないものにして、貴下を自由にしてあげたい、としょっちゅうそう思っていらしったってね。お互に今聞いても、身ぶるいが出るじゃありませんか。」

と顔を上げて目を合わせる、両人の手は左右から、思わず火鉢を圧（おさ）えたのである。

「私はまた私で、何です、なまじ薄髯（うすひげ）の生えた意気地

のない兄哥がついているから起って、相応にどうにか遣繰って行かれるだろう、と思うから、食物の足りぬ阿母を、世間でも黙って見ている。いっそ伜がないものと極ったら、たよる処も何にもない。六十を越した人を、まさか見殺しにはしないだろう。

やっちまおうかと、日に幾度考えたかね。

民さんも知っていましょう、あの年は、城の濠で、大層投身者がありました。」

同一年の、あいやけは、姉さんのような頷き方。

「ああ。」

三

「確か六七人もあったでしょう。」

お民は聞いて、火鉢のふちに、算盤（そろばん）を弾（はじ）くように、指を反らして、

「謹さん、もっとですよ。八月十日の新聞までに、八人だったわ。」

と仰いで目を細うして言った。幼い時から、記憶の鋭い婦人である。

「じゃ、九人になる処だった。貴女（あなた）の内へ遊びに行（ゆ）くと、いつも帰りが遅くなって、日が暮れちゃ、あの

濠端（ほりばた）を通ったんですがね、石垣が蒼（あお）く光って、真黒（まっくろ）な水の上から、むらむらと白い煙が、こっちに這（は）いかかって来るように見えるじゃありませんか。

引込まれては大変だと、早足に歩行（ある）き出すと、何だかうしろから追い駈（か）けるようだから、一心に遁（に）げ出してさ、坂の上で振返ると、凄（すご）いような月で。

ああ、春の末でした。

あとについて来たものは、自分の影法師ばかりなんです。

自分の影を、死神と間違えるんだもの、御覧なさい、生きている瀬はなかったんですよ。」

「心細いじゃありませんか、ねえ。」

と寂しそうに打傾く、面に映って、頸をかけ、黒繻子の襟に障子の影、薄ら蒼く見えるまで、戸外は月の冴えたる気勢。カラカラと小刻に、女の通る下駄の音、屋敷町に響いたが、女中はまだ帰って来ない。

「心細いのが通り越して、気が変になっていたんです。じゃ、そんな、気味の悪い、物凄い、死神のさそうような、厭な濠端を、何の、お民さん。通らずともの事だけれど、なぜかまた、わざとにも、そこを歩行いて、行過ぎてしまってから、まだ死なないでいるって事を、自分で確めて見たくてならんのでしたよ。

危険千万（けんのんせんばん）。

だって、今だから話すんだけれど、その蚊帳（かや）なしで、蚊が居るツていう始末でしょう。無いものは活計（たつき）の代（しろ）という訳で。

内で熟（じっ）としていたんじゃ、たとい曳（ひ）くにしろ、車も曳けない理窟ですから、何がなし、戸外（おもて）へ出て、足駄穿（ば）きで駈け歩行（ある）くしだらだけれど、さて出ようとすると、気になるから、上（あが）り框（がまち）へ腰をかけて、片足履物をぶら下げながら、母（おっか）さん、お米は？　ツて聞くんです。」

「お米は？　ツてね、謹さん。」

と、お民はほろりとしたのである。あるじはあえて莞爾（にこ）やかに、

「恐しいもんだ、その癖両に何升どこは、この節かえって覚えました。その頃は、まったくです、無い事は無いにしろ、幾許（いくら）するか知らなかった。

皆（みんな）、親のお庇（かげ）だね。

その阿母（おふくろ）が、そうやって、お米は？　ッて尋ねると、晩まであるよ、とお言いなさる。

翌日（あす）のが無いと言われるより、どんなに辛かったか知れません。お民さん。」

と呼びかけて、もとより答を待つにあらず。

「もう、その度にね、私はね、腰かけた足も、足駄の上で、何だって、こう脊が高いだろう、と土間へ、へたへたと坐りたかった。」

「まあ、貴下、大抵じゃなかったのねえ。」

フトその時、火鉢のふちで指が触れた。右の腕はつけ元まで、二人は、はっと熱かったが、思わず言い合わせたかのごとく、鉄瓶に当って見た。左の手は、ひやりとした。

「謹さん、沸しましょうかね。」と軽くいう。

「すっかり忘れていた、お庇さまで火もよく起ったのに。」

「お湯があるかしら。」

と引っ立てて、蓋を取って、燈の方に傾けながら、

「貴下。ちょいと、その水差しを。お道具は揃ったけれど、何だかこの二階の工合が下宿のようじゃありませんか。」

四

「それでもね、」

とあるじは若々しいものいいで、

「お民さんが来てから、何となく勝手が違って、ちょっ

と他所（よそ）から帰って来ても、何だか自分の内のようじゃないんですよ。」

「あら、」

とて清（すず）しい目を睜（みは）り、鉄瓶の下に両手を揃えて、真直（まっすぐ）に当りながら、

「そんな事を言うもんじゃありません。外へといっては、それこそ田舎の芝居一つ、めったに見に出た事もないのに、はるばる一人旅で逢（あ）いに来たんじゃありませんか、酷（ひど）いよ、謹さんは。」

と美しく打怨（うちえん）ずる。

「飛んだ事を、ははは。」

とあるじも火に翳(かざ)して、

「そんな気でいった、内らしくないではない、その下宿屋らしくないと言ったんですよ。」

「ですからね、早くおもらいなさいまし、悪いことはいいません。どんなに気がついても、しんせつでも、女中じゃ推切(おしき)って、何かすることが出来ませんからね、どうしても手が届かないがちになるんです。伯母さんも、もう今じゃ、蚊帳よりお嫁が欲(ほし)いんですよ。」

あるじは、屹(きっ)と頭(かぶり)を掉(ふ)った。

「いいえ、よします。」

「なぜですね、謹さん。」と見上げた目に、あえて疑(うたがい)

の色はなく、別に心あって映ったのであった。

「なぜというと議論になります。ただね、私は欲くないんです。

　こういえば、理窟もつけよう、またどうこうというけれどね、年よりのためにも他人の交（まじ）らない方が気楽で可（い）いかも知れません。お民さん、貴女（あなた）がこうやって遊びに来てくれたって、知らない婦人（おんな）が居ようより、阿母（おふくろ）と私ばかりの方が、御馳走（ごちそう）は届かないにした処で、水入らずで、気が置けなくって可いじゃありませんか。」

「だって、謹さん、私がこうして居いいために、一生

貴方（あなた）、奥さんを持たないでいられますか。それも、五年と十年と、このままで居たいたって、こちらに居られます身体（からだ）じゃなし、もう二週間の上になったって、五日目ぐらいから、やいやい帰れって、言って来て、三度めに来た手紙なんぞの様子じゃ、良人（やど）の方の親類が、ああの、こうのって、面倒だから、それにつけても早々帰れじゃありませんか。また貴下（あなた）を置いて、他（ほか）に私の身についた縁者といってはないんですからね。どうせ帰れば近所近辺、一門一類が寄って集（たか）って、」

と婀娜（あだ）に唇の端を上げると、顰（ひそ）めた眉を掠（かす）めて落ちた、鬢（びん）の毛を、焦（じれ）ったそうに、背（うしろ）へ投げて掻上（かきあ）げつつ、

「この髪を挘(むし)りたくなるような思いをさせられるに極(きま)ってるけれど、東京へ来たら、生意気らしい、気の大きくなった上、二寸切られるつもりになって、度胸を極(き)めて、伯母さんには内証(ないしょ)ですがね、これでも自分で呆(あき)れるほど、了簡(りょうけん)が据(すわ)っていますけれど、だってそうは御厄介になっても居られませんもの。」

「いつまでも居て下さいよ。もう、私は、女房なんぞ持とうより、貴女に遊んでいてもらう方が、どんなに可(い)いから知れやしない。」

と我儘(わがまま)らしく熱心に言った。

お民は言(ことば)を途切らしつ、鉄瓶はやや音(ね)に出づる。

「謹さん、」

「ええ、」

お民は唾（つ）をのみ、

「ほんとうですか。」

「ほんとうですとも、まったくですよ。」

「ほんとうに、謹さん。」

「お民さんは、嘘だと思って。」

「じゃもういっそ。」

と烈（はげ）しく火箸（ひばし）を灰について、

「帰らないでおきましょうか。」

五

我を忘れてお民は一気に、思い切っていいかけた、言(ことば)の下に、あわれ水ならぬ灰にさえ、かず書くよりも果敢(はかな)げに、しょんぼり肩を落したが、急に寂(さみ)しい笑顔を上げた。

「ほほほほほ、その気で沢山(たんと)御馳走をして下さいまし。お茶ばかりじゃ私は厭(いや)。」

といううち涙さしぐみぬ。

「謹さん、」

というも曇り声に、

「も、貴下（あなた）、どうして、そんなに、優（やさし）くいって下さるんですよ。こうした私じゃありませんか。」
「貴女（あなた）でなくッて、お民さん、貴女は大恩人なんだもの。」
「ええ？　恩人ですって、私が。」
「貴女が、」
「まあ！　誰方（どなた）のねえ？」
「私のですとも。」
「どうして、謹さん、私はこんなぞんざいだし、もう十七の年に、何にも知らないで児持（こもち）になったんですもの。碌（ろく）に小袖（こそで）一つ仕立って上げた事はなく、貴下が一

生の大切（だいじ）だった、そのお米のなかった時も、煙草（たばこ）も買ってあげないでさ。

後で聞いて口惜（くやし）くって、今でも怨（うら）んでいるけれど、内証の苦しい事ったら、ちっとも伯母さんは聞かして下さらないし、あなたの御容子（ごようす）でも分りそうなものだったのに、私が気がつかないからでしょうけれど、いつお目にかかっても、元気よく、いきいきしてねえ、まったくですよ、今なんぞより、窶（やつ）れてないで、もっと顔色も可（よ）かったもの……」

「それです、それですよ、お民さん。その顔色の可かったのも、元気よく活々（いきいき）していたのだって、貴女、貴女

の傍に居る時の他に、そうした事を見た事はありますまい。

私はもう、影法師が死神に見えた時でも、貴女に逢えば、元気が出て、心が活々したんです。それだから貴女はついぞ、ふさいだ、陰気な、私の屈託顔を見た事はないんです。

ねえ。

先刻もいう通り、私の死んでしまった方が阿母のために都合よく、人が世話をしようと思ったほどで、またそれに違いはなかったんですもの。

実際私は、貴女のために活きていたんだ。

そして、お民さん。」
あるじが落着いて静にいうのを、お民は激しく聞くのであろう、潔白なるその顔に、湧上るごとき血汐の色。
「切迫詰って、いざ、と首の座に押直る時には、たとい場処が離れていても、きっと貴女の姿が来て、私を助けてくれるッて事を、堅くね、心の底に、確に信仰していたんだね。
まあ、お民さん許で夜更しして、じゃ、おやすみってお宅を出る。遅い時は寝衣のなりで、寒いのも厭わないで、貴女が自分で送って下さる。

門（かど）を出ると、あの曲角あたりまで、貴女、その寝衣のままで、暗（やみ）の中まで見送ってくれたでしょう。小児（こども）が奥で泣いている時でも、雨が降っている時でも、ずッと背中まで外へ出して。

私はまた、曲り角で、きっと、密（そっ）と立停（たちど）まって、しばらく経（た）って、カタリと枢（くるる）のおりるのを聞いたんです。その、帰り途（みち）に、濠端（ほりばた）を通るんです。枢は下りて、貴女の寝た事は知りながら、今にも濠へ、飛込もうとして、この片足が崖（がけ）をはずれる、背後（うしろ）でしっかりと引き留めて、何をするの、謹さん、と貴女がきっというと確（たしか）に思った。

ですから、死のうと思い、助かりたい、と考えながら、そんな、厭（いや）な、恐ろしい濠端を通ったのも、柩をおろして寝なすった、貴女が必ず助けてくれると、それを力にしたんです。お庇（かげ）で活きていたんですもの、恩人でなくッてさ、貴女は命の親なんですよ。」

とただ懐かしげに嬉しそうにいう顔を、じっと見る見る、ものをもいわず、お民ははらはらと、薄曇る燈（ともしび）の前に落涙した。

「お民さん、」

「謹さん、」

とばかり歯をカチリと、堰（せ）きあえぬ涙を噛（か）み留めつ

つ、

「口についていうようでおかしいんですが、私もやっぱり。貴下は、もう、今じゃこんなにおなりですから、私は要らなくなったでしょうが、私は今も、今だって、その時分から、何ですよ、同(おんな)じなんです、謹さん。慾(よく)にも、我慢にも、厭で厭で、厭で厭で死にたくなる時がありますとね、そうすると、貴下が来て、お留めなさると思ってね、それを便りにしていますよ。

　まあ、同じようで不思議だから、これから別れて帰りましたら、私もまた、月夜にお濠端を歩行(ある)きましょう。そして貴下、謹さんのお姿が、そこへ出るのを見

ましょうよ。」

と差俯向《さしうつむ》いた肩が震えた。

あるじは、思わず、火鉢なりに擦り寄って、

「飛んだ事を、串戯《じょうだん》じゃありません、そ、そ、そんな事をいって、譲《ゆずる》（小児の名）さんをどうします。」

「だって、だって、貴下がその年、その思いをしているのに、私はあの児《こ》を拵《こしら》えました。そんな、そんな児を構うものか。」

とすねたように鋭くいったが、露を湛《たた》えた花片《はなびら》を、湯気やなぶると、笑《えみ》を湛え、

「ようござんすよ。私はお濠を楽《たのし》みにしますから。

でも、こんなじゃ、私の影じゃ、凄(すご)い死神なら可(い)いけれど、大方鼬(いたち)にでも見えるでしょう。」

と投げたように、片身を畳に、褄(つま)も乱れて崩折(くずお)れた。

あるじは、ひたと寄せて、押(おさ)えるように、棄(す)てた女の手を取って、

「お民さん。」

「………」

「国へ、国へ帰しやしないから。」

「あれ、お待ちなさい伯母さんが。」

「どうした、どうしたよ。」

という母の声、下に聞えて、わっとばかり、その譲

という児が。
「煩(うるさ)いねえ！ちょいと、見て来ますからね、謹さん。」
とはらりと立って、脛(はぎ)白き、敷居際の立姿。やがてトントンと階下(した)へ下りたが、泣き留(や)まぬ譲を横抱きに、しばらくして品のいい、母親の形(なり)で座に返った。燈火の陰に胸の色、雪のごとく清らかに、譲はちゅうちゅうと乳を吸って、片手で縋(すが)って泣いじゃくる。
あるじは、きちんと坐(すわ)り直って、
「どうしたの、酷(ひど)く怯(おび)えたようだっけ。」
「夢を見たかい、坊や、どうしたのだねえ。」
と頰(ほお)に顔をかさぬれば、乳(ち)を含みつつ、愛らしい、

大きな目をくるくるとやって、
「鼬が、阿母（おっか）さん。」
「ええ、」
二人は顔を見合わせた。
あるじは、居寄って顔を覗（のぞ）き、ことさらに打笑い、
「何、内へ鼬なんぞ出るものか。坊や、鼠の音を聞いたんだろう。」
小児（こども）はなお含んだまま、いたいけに捻向（ねじむ）いて、
「ううむ、内じゃないの。お濠（ほり）ン許（とこ）で、長い尻尾で、あの、目が光って、私（わたい）、私を睨（にら）んで、恐（こわ）かったの。」
と、くるりと向いて、ひったり母親のその柔かな胸

に額を埋（うず）めた。

また顔を見合わせたが、今はその色も変らなかった。

「おお、そうかい、夢なんですよ。」

「恐かったな、恐かったな、坊や。」

「恐かったね。」

からからと格子が開いて、

「どうも、おそなわりました。」と勝手でいって、女中が帰る。

「さあ、御馳走だよ。」

と衝（つ）と立ったが、早急（さっきゅう）だったのと、抱いた重量（おもみ）で、裳（もすそ）を前に、よろよろと、お民は、よろけながら段階子（だんばしご）。

「謹さん。」
「…………」
「翌朝（あした）のお米は？」
と艶麗（はでやか）に莞爾（にっこり）して、
「早く、奥さんを持って下さいよ。ああ、女中さん御苦労でした。」
と下を向いて高く言った。
その時襖（ふすま）の開く音がして、
「おそなわりました、御新造様（ごしんぞさま）。」
お民は答えず、ほと吐息。円髷（まげ）艶（つや）やかに二三段、片頬（かたほ）を見せて、差覗（さしのぞ）いて、

「ここは閉めないで行(ゆ)きますよ。」

明治三十八（一九〇五）年六月

底本：「泉鏡花集成４」ちくま文庫、筑摩書房
　　１９９５（平成７）年10月24日第1刷発行
底本の親本：「鏡花全集　第九巻」岩波書店
　　１９４２（昭和17）年３月30日第1刷発行
入力：門田裕志
校正：今井忠夫
２００３年８月31日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんで

す。